

乳がん検診（施設）

動向および方法

本邦における乳がんの罹患率は大変高く、2位の大腸を大きく引き離し依然1位となっている。神奈川県は乳がん受診率は大変低い。従来の老人保健法による対策型検診の以前から、当協会では40歳台はマンモグラフィ併用検診法（MMG群）2方向、50歳以上はMMG1方向隔年、任意検診にはマンマエコー併用検診（以下US群）を30歳台は第一選択とし、40歳台以上逐年検診にはUS群とMMG群を交互に行う検診を積極的に推奨して来たが、MMG群は53%US群は26%と、共に増加の傾向にある。

また当協会では乳がんの早期発見・治療を目指し、“ピンクリボンかながわ”の事務局としてその活動に積極的に取り組んで来た。

結 果

総受診者は、年間226人減少、減少傾向は少なくなってきた。視触診単独検診は早期がんの発見にはあまり期待できないのに、官庁、企業検診等で若年者や隔年検診に採用されている。受診者に返って安易な安心を与える点でも望ましくない。MMG群は安定し定着したものとなり、US群もMMG群の約半数に安定してきた。経過観察（以下再検）群は受診者の毎年約15%でその中でがんと判明する割合は0.5%と少ない。変化なき者を1次に戻してもすぐ要精検となってしまうのが多く、1次検診の精度管理の向上が待たれる（表1、6）。要精検率は視触診群1.80%US群7.1%、MMG群5.8%で総精検率は10%で、読影医の精度管理の意識の向上があればもう少し減少できるかも知れない。精検受診率はMMG群が70%、他の85~90%に比して低い。

発見乳がんは59例、発見率0.28%（表2）。内訳（表3・4・5・6）がんの発見は視触診より2例0.15%、US群5例0.09%、MMG群37例0.33%、再検群15例0.48%でMMG群と再検群が多い。視触診群とUS群は発見乳がんは少い。要精検率は5.9%と適正であるが、精検受診率は76.6%であり変化はない。

精検受診者の陽性的中率は視触診9.5%、US群1.5%、MMG群8.4%で全体で5.4%と良好だが再検群は0.48%と効率的でないのは1次検診に戻すべき者がまだ多いことを表している。MMG群の陽性的中率が高いが、US群が低いのは若年者が多いのと、まだUS検診の精度管理が十分でないため、今後の努力が求められる。年齢別受診者は40、50、60、30歳台の順で最も少ない30歳台の乳がんの2例は視触診群とUS群からの各1例である。

発見乳がんは、30歳台2例、40歳台17例、50歳台

12例、60歳台22例、70歳台6例の59例で60歳台がピークである。一方発見乳がん側から見ると腫瘍無触知25例42%、腫瘍22例37%、硬結12例20%、その他1例1%視触診のみの検診で腫瘍その他の23例39%と硬結が病変診断されたとは限らないので、視触診検診では早期がんの50%検出は無理かも知れない。MMGでは所見なしは5例8%腫瘍9例15%石灰化像29例49%、その他の所見（FAD、AD）16例27%カテゴリー3以上が86%が有所見で若年者を除いた多くの受診者に有効と言える。US群では無施行・結果不明の6例を除いた53例中43例の81%に有所見で無所見は石灰化像群のみである。カテゴリー4、5は進行がんも含まれるが80%近くが早期がんが期待される。

腫瘍径が浸潤範囲それにDCISの広がりかの何れかが判明している55例93%について検討すると0.5cm以下が6例10%、1.0cm以下18例32%、1.5cm以下が29例52%、2.0cm以下39例71%、2.0cm以上16例29%であるが広範囲の中にはDCISの広がり範囲も含まれているので、実際には検診発見乳がんでは大径腫瘍は希で殆どが早期癌の可能性がある。術前化療5例や手術不能例は1例であった。従って乳房温存手術33例56%SLNBを省略したものが3例、乳房切除例は13例あるが10例はSLNBを加えた早期がん2例に再建術を行っている。病理診断は穿刺細胞診10例17.3%、針生検48例76%（複数施行を含む）摘出3例5%である。術前または術後に判明した病理組織IDC-23（39%）DCIS-17（29%）IV PAPTUB-6（10%）SCIR-6（10%）ISOLTUB-4（7%）ILOB-0であった。他にSCIRが10例に加わっていた。リンパ節転移n0 43例73%、3個3例5%IHn1-aまでが85%で浸潤がん69%の割には予後は期待出来そうである。サブタイプはLuminalA Type 66%；B, H+, Ki67 high type20%trip（一）5%で昨年とあまり変化はない。従って術後療法は照射が51%、ホルモン療法は37%に行われ、化学療法のみはなかった。後療法無しは25%もあったが非浸潤がんに対してであろう。

考 察

近年DCISの割合が増加しているが、はたして予後の改善にどれほど貢献するかは疑問視されている。またサブタイプ別の予後と早期発見乳がんとの関係はまだ明らかになっていない。発見乳がんの予後を予測した検診が可能になる時代が来ることを期待したい。

関係の集計表は101頁に掲載